

私の敦煌学

田 中 良 昭

序——敦煌学とは——

ご紹介をいただきました駒澤大学の田中良昭でございま
す。此の度貴大学禅研究所の公開講演会にお招きいただき
ましたことを誠に光榮に存じます。特に所長の竹内道雄先
生をはじめ、所員の諸先生には、永年にわたってご指導ご
交誼をいただいており、今回私にお話する機会を与えてい
ただきましたことに對し心より御礼申し上げます。

ところでこれからお話するテーマを「私の敦煌学」とさ
せていただきました。それは今回の講演会の直接の窓口を
された研究所主任の川口高風先生から、私の話を聞いて下
さる方が主として現在宗教学を受講している大学一年生の

私の敦煌学（田中）

学生諸君であることを前もってお聞きしていただからです。

大学に入つてはじめて宗教学を勉強している人たちに、仏
教学や禅学の専門的な話をするよりも、私が学生時代から
今日まで、どのような先生や書物に出会い、敦煌学——と
いつても敦煌禪宗文献学に限定されますが——に興味を持
つに至つたか、その足跡をふりかえりつつ、日々の体験を
語る方が学生諸君のためになるのではないか、と考えたか
らです。従つてその内容は、私の履歴書を公開するような
ことになつてしまいますが、どうかお許しをいただきたい
と思います。

さて、「私の敦煌学」に入る前に、「敦煌学」ということ
について概略を話しておきたいと思います。まず敦煌とい

う地名については、既にお聞き及びのことだと思います。中國甘粛省の西の端にある沙漠の中のオアシス都市で、中原と西域を結ぶ交通の要衝です。古くから文化の栄えたのが東の中国と西のギリシャ・ローマですが、その間の交易路がシルクロードと呼ばれています。敦煌はこのシルクロードの中国から西域への出口に位置します。仏教も北伝仏教の大半はこのシルクロードを経由して西域から中国へ入ったと考えられますから、仏教の渡来僧も、仏像や經典類も、その多くのものが敦煌での滞留を経て中原にもたらされたといえましょう。

このように、敦煌は古來交通の要衝として重要な役割を果たしていたのですが、それが一躍世界の関心を集めることになったのは、極めて偶然の出来事でありました。西暦一九〇〇年——これはとても記憶し易い年ですが——、当時中國は清という国で、その光緒二六年の六月二十五日のこと、敦煌の東南約三〇キロにある鳴沙山莫高窟を管理していた道士の王圓籙が、現在第一六窟と呼ばれる窟院の入口通路の右側の側壁の割れ目から煙が吸い込まれていく光景を目撃し、その割れ目を取り除いてみるとその奥に新たな洞窟

——現在の第一七窟——のあること、しかもその中に、厖大な数の古文書類がうず高く積みあげられていることを発見したのです。これがすなわち敦煌文献——中国では敦煌遺書といいます——の出現です。

その発見は、当時西域探検に当たつていた各国の探検隊の知るところとなりました。そして次々と敦煌へやつて来て古文書類を自國へと持ち出したのです。まず最初に来たのがハンガリー人で後にイギリスに帰化したオーレル・スタンで、一九〇七年にやつてきて持ち出したものがイギリスのロンドンにある大英博物館（現大英図書館）に収蔵されました。これがスタン本と呼ばれるものです。次いで翌一九〇八年にフランスの東洋学者ポール・ペリオがやってきて、数こそスタンには及びませんが、内容的に秀れた文献を持ち出し、フランスのパリにある国立図書館に収藏しました。これがペリオ本と呼ばれるものです。

このスタン、ペリオの外国人による中国の貴重な“宝物”的持ち出しを知った時の清朝政府は、一九〇九年あわてて残りの文献を北京に送り、京師図書館（現北京国立図書館）に収藏しました。これが北京本と呼ばれるものです。

その後一九一〇年から一九一二年にかけて日本の大谷光瑞師を団長とする大谷探検隊によつて持ち出されたものが、京都の竜谷大学と当時日本領であった中国東北部の旅順博物館に収蔵され、大谷本と呼ばれています。この内、旅順博物館に収蔵されたものは、行方不明となつた数点を除き、現在は北京国立図書館に移されています。更に一九一四年から一九一五年にかけてロシアのオルデンブルクが持ち出したものがセント・ペテルスブルクにあるロシア科学アカデミー東洋学研究所に収蔵され、オルデンブルク本と呼ばれています。

以上の如く現在世界に五つのコレクションが存在するわけですが、その他に台湾の台北中央図書館に収蔵されている台湾本、中国の上海図書館や敦煌県博物館、日本の書道博物館等に収蔵されたもの、あるいは個人所蔵のもの等があります。そしてこれらの敦煌文献については、各コレクション毎に整理・修復・分類・目録の作成・マイクロフィルム撮影とその交換・影印本の出版等が継続的に実施され、各コレクションの未整理部分とオルデンブルク本以外については、日本に居ながらにして写真による調査・研究が容

易になりました。ただ写真はあくまで写真であつて、実物に当たつて調査し研究することが重要であることはいうまでもありません。

ところで敦煌学という場合、以上述べたような、莫高窟第一七窟——ここから厖大な数の仏教經典が出てきたことから、この第一七窟を藏經洞ともいいます——から出現した文献を研究対象とするものに限定されません。敦煌莫高窟は、敦煌市東南三〇キロにある鳴沙山の山腹に幅約二キロにわたり、現在番号を付されている洞窟が四九二窟あり、それぞれの洞窟に壁画が画かれ、その奥に仏像が塑造され、一大佛教博物館の様相を呈しています。この世界に誇る文化財をいかに保存していくかが大きなテーマであり、その学術的な研究と管理の任に当たつては敦煌研究院です。この敦煌研究院の研究領域は極めて広く、平成二年（一九九〇）一〇月に開催された第二回敦煌学国際学術討論会では、（一）石窟考古、（二）壁画塑像、（三）歴史・地理・宗教、（四）文学・言語の四部会に別れて討論が行われましたが、ここに示された項目がまさしく敦煌学の内容を示しているわけです。従つて私が「私の敦煌学」と題してお話をその「敦

「煌学」とは、敦煌研究院の分類でいえば〔三〕の宗教に属し、しかもその宗教内の仏教、仏教内の禅宗という極めて限られた部分を示すに過ぎません。そうした極めて限られた部分を担当するそれぞれの研究者がいて、その研究成果が発表され、その成果を総合するところに「敦煌学」が成立する、と見ることができます。敦煌は英語の表記では Dun-huang で ドゥンハノロジー という表記で既学も Dunhuanyology (ドゥンハノロジイ) という表記で既に世界的な市民権を得て いるのです。私もこの敦煌学の一翼を荷なつて いるのだ と いう自覚と責任を感じて いる次第です。

—私の敦煌学 I—或従知識

これから本題の「私の敦煌学」に入りますが、この章には「或従知識」、次の章には「或従経巻」のサブタイトルをつけてみました。あまり見なれない言葉だと思いますので、その言葉の意味について述べておきましょう。

この言葉は、曹洞宗の開祖である道元禪師の代表的著作である『正法眼藏』仮性巻に、「或従知識、或従経巻するに、

云々」として示された言葉です。道元禪師は、その生涯を通じて「仏道を学ぶ」すなわち「学道」ということを貫かれ、門人たちにもそれを指導されたのですが、その学道の具体的な方法として、一つは既に道を具えた善知識すなわちよき指導者の教えに従つて学ぶこと、今一つは道についての教えを書き記された経巻すなわち秀れた書物に従つて学ぶことを説かれたのです。道元禪師の場合は仏道ですが、私たちが学問をする際にも、この道元禪師の示された方法はそのまま活用することができます。よき指導者につき、秀れた書物によつて学ぶということは、学問をする者とのるべき最善の方法であることは当然のことでありましょう。これから学問をしようとする皆さんも、是非この方法でやつていただきたいし、私自身のこれまでの研究の歴史を振りかえつてみても、多くの秀れた指導者との出会いがあり、先人の遺された貴重な書物の導きによつて、研究の進展がはかられたことを実感しております。そこでこの章では、私の出会つた指導者たち——知識——について述べ、次の章では、多くの貴重な研究書——経巻——について述べ、更にこの両者の導きをふまえた第三の「私の敦煌学」とも

いうべき敦煌文献の実物調査と研究成果のまとめについて順次述べていこうと思います。

(一) 駒澤大学の学部時代

私が駒澤大学仏教学部仏教学科に入学したのは昭和二八年（一九五三）のことですから、今から四二年も前のことです。既に終戦から八年を経ていたので世情はかなり安定の度を増していましたが、物質的には決して豊かというわけではありませんでした。しかも駒澤大学仏教学部は、将来曹洞宗の寺院住職となるべき私にとって最善のコースであります。高校時代は他の国立大学を目指そうとする若気の至りで、実際に駒澤大学の門をくぐつたのは数年のプランクの後でした。最初の二年間はいわゆる教養課程の科目が大部分で、語学としては第二外国語にドイツ語を、そして専門の語学として梵語を履修しましたが、今日から考へると、外国語で書かれた禅宗関係の論文は、ドイツ語よりはフランス語で書かれたものが多く、失敗だったと思ひます。それはフランスの植民地政策上に設置されたハイの極東学院で、秀れた東洋学者が養成され、その成果が

フランス語で出版されていた事実をかなり後になつて知つたことからも、また後に専門的に研究を始めた敦煌文献のペリオコレクションがフランスにあることからもいえることです。もつとも大学の入学時点で、自分が一体何を専攻するのかもわからない段階のことですから、語学の選択を誤ったとしても仕方がないことだと思います。それではドイツ語を履修したからドイツ語がモノになつていているかといえば、単位が終わつた段階ですべて無に帰しているのですから、たとえフランス語を履修していたとしても、結果は同じだつたと思います。そのいい例が今一つの梵語です。仏教学をやるにはどうしても梵語が必要だということは以前からわかつっていたのですが、いよいよ二年次になつて梵語の授業に出でみると、受講生は一〇名足らず、しかも教科書に指定された榎亮三郎先生の『実習梵語学』は入手できず、友人から借りて写している内にどんどん先に行かれてしまうという状況で、実質脱落組に入つてしましました。大学の教養課程では、広い教養と将来専門で学ぶ学問に必要な語学をしつかり身につけるというのが大切な役割である筈なのに、その両方共に決して満足のいく成果をあげ得

なかつた、というのが率直な感想です。

また大変言い訳がましいことですが、私は学資は自分でまかぬという気持ちが強く、日本育英会の奨学金と小学生中学生を対象とした家庭教師を週三日実施して得たアルバイト代を生活費にまわしていました。その上、将来寺院住職として教化活動に従事するには、日曜学校や夏季伝道をその活動の中心としていた児童教育部というサークルに入部し、三年次にはその幹事長をやる程にサークル活動にめり込んでしまいました。勿論このサークルで得たものは、極めて大なるものがありますが、将来研究者としての道を歩もうとする者には、かなりの負担になつたことも事実で、授業こそ出席はしたものの、予習・復習をはじめ、専門書をひもとくようなことはほとんどできなしまま卒業年次を迎えてしました。

ところで私が在学した頃の駒澤大学仏教学部には、錚々たる教授陣が揃っていました。私は仏教学科に所属していましたが、禪学や宗学関係の科目も選択することができました。特に印象深い先生としては、仏教学関係では衛藤即応、保坂玉泉、増永靈鳳、水野弘元等の諸先生、禪学・宗

学関係では山田靈林、沢木興道、博林皓堂等の諸先生を挙げることができます。その他非常勤でも仏教概論の宮本正尊先生、仏教美術の逸見梅栄先生、一般教養の倫理学の川田熊太郎先生等の講席に列することができ、充実した講義を受けることができました。

いよいよ卒業年次に入り、卒業論文のテーマをきめなければならなくなつたのですが、今日のように学部の三年から演習でもあればテーマも見つけ易かつたと思います。しかし、当時は概説的な講義が中心でしたので、容易に問題をしほることができず、それでも日本の仏教に直接かわりのあるテーマにしようということで、仏教の中でも大乗仏教を、そして大乗仏教の中心思想として空を、空も理論よりは実践を、というような形で焦点をしほつていき、増永靈鳳先生に指導教授をお願いして、「大乗仏教における空の実践に関する研究」を論題として提出しました。論題提出から論文提出までの約半年の間、可能な限り参考書を集めはじめての論文作成に努力はしたもの、この時位普段の積み重ねのないことを反省させられたことはありますでした。その頃は、論文の下書きができると指導教授

に見てもらい、これでよしとのお言葉をいただいて清書にとりかかるのが通例でしたが、下書きができ上がった頃、偶々増永先生がインド・ネパールへ旅行されていて見ていたところができず、そのまま提出してしまいました。後で口頭試問の際に、指導教授の増永先生からはあまり厳しい試問はありませんでしたが、指定教授になられた宮本正尊先生からは、私の論文の文体についてご注意をいただきました。それは、論文というのは読む人を立ち止まらせ、考えさせなければいけない。それなのに私の論文はすらすら読めてしまつていつの間にか終わってしまう、というものでした。このお言葉はとても大切なことだと今でも肝に铭じています。

(二) 駒澤大学大学院修士課程の時代

卒業論文を書いてみて少し学問をすることの意味にふれたこと、学部時代のサークル活動へのめり込みに対する反省とその取り戻しをしたいという思い、学問好きの父親の感化等があつて、多くの同窓の友人たちが本山安居を目指していた頃に、自分は大学院へ進学しようという気持ち

になつて、修士課程の仏教学専攻に籍を置くことになりました。昭和三二年（一九五七）から昭和三四年（一九五九）にかけてのことです。当時の大学院修士課程も、今日のように一人の教員が演習と講義を担当するということではなく、講義だけしか行われていませんでした。ただその講義は、それぞれ特講すなわち特殊講義がその名称とされているよう、概論的なものはほとんどなく、各分野の特殊問題についての講義であり、学部で聞いた講義よりはかなり専門的で高度な内容のものでした。そんな特講の中で私が特に関心を持つようになったのは、増永先生の支那仏教特講で扱われた中国禪宗史の講義でした。先生は最初、原稿用紙の分厚い綴じ込みに表紙をつけて黒ひもで結んだものを持参して、講義をされていました。私は初めは先生が昭和一九年（一九四四）四月に、学位論文「禪の思想とその歴史的展開」を改題して日本評論社から出版された『禪定思想史』の原稿を持参されたものかと思っていましたが、実際はそうではなく、私が修士課程に入学した昭和三二年（一九七五）五月に、鴻盟社から出版された『禪宗史要』の原稿であつたことに最近気が付きました。この本が出る直前

の原稿だったわけです。増永先生は私の学部時代にも禅宗史という講義を担当させていたのですが、どういうわけか私はその単位を履修しなかつたのです。従つて、大学院での中国禅宗史の講義は、私にとつては初めてのものであり、しかも卒業論文で扱つた「空の実践」の結論を、六祖慧能が五祖弘忍を訪ねるきっかけとなつた『金剛經』の「應無所住、而生其心」に求めたこともあって、中国禅宗史に対する関心を急速に高める切っ掛けとなりました。

またちょうどその頃、駒澤大学で禅宗辞典を編纂する企画が具体化し、禅宗辞典編纂所が図書館の一室に設けられ、その主任として招かれたのが駒澤大学で中国文学を学ばれ、京都大学人文科学研究所の助手をしておられた篠原寿雄先生でした。先生は京大仕込みのゼミを駒澤にも植えつけるべく、毎週一回放課後を利用して、ご自分で『祖堂集』達摩章をガリ版刷りで用意され、それを大学院生に指導して下さいました。今迄参考書類は読んでいても、原典資料を直接読解することは初めての経験で、とても新鮮な気持ちがしました。後に私が駒澤大学の教員として採用していただいた時、その時のゼミの思い出が忘れられず、今日まで

自主ゼミを継続しているのも篠原先生のお蔭かと思い感謝しております。

この『祖堂集』が、中国禅宗史の研究資料として極めて重要なものであることは、後述する柳田聖山先生が夙にご指摘になられ、先生ご自身の手によつて他の禅宗祖録と共にガリ版刷りのテキスト公刊がなされ、訳注、そして『祖堂集索引』三巻の出版等、先生のライフワークというべき研究対象であつたのですが、今一つ中国禅宗史の研究資料として重要なのが敦煌文献です。敦煌文献を用いた中国禅宗史の研究は、日本では宇井伯寿先生や鈴木大拙先生等の秀れた成果が既に公にされていたのですが、私が敦煌文献の研究に新たな目を開く切っ掛けとなつたのが、修士課程に入学した年の暮、すなわち昭和三二年（一九五七）一二月に彰国社から出版された関口真大先生の『達摩大師の研究』だったのです。

関口先生は大正大学の教授でご専門は天台止観の研究ですが、天台の止観と禅宗の禪との関係について秀れた業績をあげておられました。周知の通り達摩大師は禅宗では初祖と仰がれ、最も重要な祖師であるわけですが、その禅宗

で最も大切な達摩大師に関する研究を天台学の専門家が出版したということは、禅宗の曹洞宗の僧籍を持ち、中国禅宗史をこれから研究しようとしている私にとっては大変な衝撃でした。この本は題名こそ『達摩大師の研究』とありますですが、実際は達摩大師の名を冠した初期の禅語録——これを達摩論といいます——の研究で、従来一般にそれ等の達摩論をそのまま達摩大師の撰述として来た定説に対し、実は後の禅宗の人びとが自らの思想を主張するために、達摩に仮託して著わした偽書であり、真の作者はどの系統の誰であるかを論証しようとした画期的な研究成果であったのです。私は最近この書をもって、戦後における中国禅宗研究の新たなスタートが切られたと思うようになりました。

ところでこの本で扱われている達摩論は、その大部分が敦煌文献、すなわち敦煌禅宗文献であることが私をその分野の研究に向けさせる大きな力になりました。そしてその刊行が私の大学院修士課程一年の終わり近くであつたことも、私にとっては大きな幸運であつたと思います。修士課程は僅かに二年間で、その修了前に修士論文——枚数は四

百字詰原稿用紙で一五〇枚以上三〇〇枚です——の提出が義務づけられています。大学院に入学した時点で漠然と中國禅宗史を専攻しようという気持ちはありましたがあくまで具体的に修士論文の論題をどうしようかと思案していたまさにその時に、初期禅宗語録のまったく新しい視点からの研究成果が公にされたのですから、こんなに喜ばしいことはありません。早速購入して赤鉛筆で傍線を引きながら熟読させていただきましたが、大学院生レベルでも十分理解のできる極めて論旨明快な書物だと思いました。そしてこの書物に導かれながら、修士論文の論題を「初期禅宗史と心性の問題」とすることにしました。ここで心性という問題を提起したのは、多くの達摩論が『安心論』『修心要論』『觀心論』『無心論』の如く、「心」を中心テーマにしていることに依るものでした。また「初期禅宗史」という以上、語録と共に重要な原典資料である燈史の研究が必要ということです、先に述べた篠原先生も校注を発表されている『楞伽師資記』を併せ研究することにしました。論題を提出した二年次の六月から翌年一月までの七カ月間、といつても本格的に取り組んだのは九月以降でしたが、修論に明け暮れた

毎日でした。こうして原稿用紙二五〇枚の草稿が完成したのが提出締切の九日前、正副二部を提出しなければならないのに、当時はコピー機もありませんし、誰か清書をしてくれる人に依頼するには日数がありませんので、すべて自力で清書することを決意し、それから八日間、一日六五枚の清書を目標に頑張り続け、何とか締切に間に合わせました。提出後は茫然自失の数日を送った記憶があります。しかし、修士論文を書いたことによつて研究意欲は一層高まり、前年に発足したばかりの博士課程への進学を目指すことになつたのです。

(三) 駒澤大学大学院博士課程の時代

昭和三四年（一九五九）博士課程に入学したものの、今日のように毎週一回の研究指導の時間があるわけではなく、自分の選んだ指導教授と個人的に相談して指導を受け、年度末に必要な数のレポート——一年次二、二年次二、三年次一の計五つ——を指導教授に提出するというのが当時の規則でした。今日では日常の研究指導の準備こそ大変ですが、特にレポートが義務づけられていない分、楽かも知れ

ません。研究テーマは当然のことながら修論で取り組んだ中国初期禅宗の歴史を、敦煌文献の調査・研究によつて更に追求しようとしました。もちろん敦煌文献といつてもその実物を調査することは不可能で、マイクロフィルム撮影によつて日本にもたらされたものを拡大して焼き付けられた写真によらざるを得ません。しかもその写真は、当時日本では東京駒込にある国立国会図書館支部の東洋文庫と京都大学人文科学研究所にしかありませんでした。

私は大学入学前の浪人時代から駒澤大学の学部と大学院の修士課程に在学中は、かつて父が所有していた目黒区の住居に姉や兄と住んでいましたが、駒込にある東洋文庫へ通うのには不便ということ、また駒込には昔父が在籍した吉祥寺の経営する施檀寮があり、偶々空室があるということから、博士課程一年の秋一〇月より施檀寮に入寮させていただきました。この寮は、曹洞宗寺院の関係者で東京大学に学ぶ人が中心でしたが、私のように駒澤大学に通う人も含まれ、全部で十数名の寮生が自主的に運営しており、自由な気風がみなぎっていました。私はここに大学院博士課程を終わり、駒澤大学仏教学部の助手兼駒澤

短期大学仏教科講師に採用された二年目の昭和三八年一〇月までの四年間在籍したのですが、その間、自由に勉強させていただき、また寮生のコンパで飲み語る機会も多くありました。その時の寮長を勤めておられたのが、今回お招きをいたいた貴大学禪研究所所長の竹内道雄先生です。先生は、当時東京の文京高等学校で日本史を担当しておられ、月に一回位ご家族のおられる新潟県十日町市の神宮寺へお帰りになるという生活を送つておられました。お酒もお好きで、一杯入ると十日町小唄が出るという楽しいお酒の方ですが、ちょうど吉川弘文館の人物シリーズの『道元』を執筆された時期で、先生はこの仕事に大変なエネルギーを注がれ、夜を徹しての取り組みで、私たち寮生にも大いに刺激を与えて下さいました。この本は、最近改訂版も出され、道元研究の名著の名を縦にしています。

さて、この施設から東洋文庫までは徒歩で僅かに十分という便利さで、駒大大学院修士課程の講義の集中している水曜と木曜はその講義を聴講するために駒澤へ通いましたが、それ以外の日は東洋文庫へ通うというのが私の日課でした。東洋文庫の閲覧室にはいきませんでしたが、それから岩井先生のお言葉通りにはいきませんでしたが、それから東洋文庫の閲覧室と唐代史研究室を利用させていただきました。閲覧室は閲覧票を持つていれば誰でも利用できますが、唐代史研究室の出入りは、当時この部屋を管理しておられた池田温先生の特別のご配慮によるものです。特に部分的にしか将来されていなかつたペリオドの写真が唐代史研究室にあり、その調査の便を与えていただけたことは、

本当に有り難いことでした。このペリオ本の調査で、二つの重要な文献を発見することができました。一つは、先に修士論文を書く際に研究した初期禅宗の歴史書、すなわち燈史の一種である『楞伽師資記』が、首部の淨覺の序文の中途からしか知られていなかつたのですが、その序文の欠文のかなりの部分を補う断片（P三二九四）が出現したのです。この調査結果は、今一つの新出断片（P三五三七）と共に、昭和三七年（一九六二）三月発行の『宗学研究』四号に、「敦煌新出ペリオ

本二種について——特に淨覺序の首次を補う——と題して発表しました。今一つは、禅宗の偈頌の一種で、修道の困難さを旅人の行路の困難さに譬えた『行路難』の異本（P三四〇九）が発見されました。『行路難』については、既に数種の異本が知られて研究もされており、系統を異にするものの存在が明らかになつたので、それらを総合し、当時駒澤大学の学内雑誌であった『仏教学会誌』三号に発表するためには原稿を作成し、今思ふと冷汗三斗であります。この道の大家であられる当時京都大学の入矢義高先生に添削をお願いしてしまいました。入矢先生から句読の誤り等

をご指摘いただいた上、紙の帖り合わせや縫い目等、写真のみで結論は出せず、実物での調査の必要性をアドバイスしていただきました。尚この論文は、昭和三六年（一九六二）二月、先の雑誌に「敦煌出土『行路難』数種について——ペリオ本三四〇九号を中心として——」と題して発表しました。

入矢先生と同様に、京都で敦煌禅宗文献の研究を精力的に進められていたのが、先にも述べた柳田聖山先生です。柳田先生は当時花園大学の教授職にあり、昭和二九年（一九五四）四月発行の『日本仏教学会年報』一九号に、「燈史の系譜」と題する大論文を発表され、これが後に国際的な評価を受けるようになるのですが、既に敦煌文献による初期禅宗史に関する新研究を次々と発表しておられ、私にとっては直接講義を聞いたり演習の指導を仰ぐというわけにはいかず、もっぱら先生の発表される論文の抜刷を送つていただきてそれを読ませていただくことと、私自身が発表した論文の抜刷をお送りしてアドバイスをいただくという、いわば通信教育のような方法であったわけです。特に柳田先生からいただいた大きな学恩は、昭和三七年（一九

六二) 頃だつたと思いますが、『敦煌雑録』に掲載された「唐

いと思つています。

末禅宗雜記付法事』と擬題された北京本讐二九の本文を記されたノートを貸与して下さつたことです。このテキスト

は、唐末の禅宗燈史の一つである『聖冑集』の卷一部分に相当し、その一部が密教的に改変されたもので、柳田先生は『聖冑集』の別本とされていました。後で述べますが、実はこのテキストが、長い標題を持った密教文献の一部分であつたわけですが、この時点ではそれもわからず、ただ禪と密教との交渉があつたことを示す独特の文献であることに注目し、このテキストを基にそれと連続する文献（S

二一四四）を含めて、昭和三八年（一九六三）四月発行の

（一）矢吹慶輝先生の著作

『宗学研究』五号に、「唐末の伝灯資料に顯われた禪と密教との交渉」と題する論文にまとめて発表しました。これはまさに先生のお蔭によるものです。

以上は主として、私が大学院生として研究生活を送つていた際にご指導下さった先生方を中心に、私自身の研究の歩みを述べてきましたが、今度は視点をかえ、サブタイトルに「或從經卷」とある通り、私が自分の研究を進める上でもっとも重要な参考書として利用させていただいたものを中心に述べてみたいと思います。

二 私の敦煌学Ⅱ——或從經卷——

こうして駒澤大学の大学院に籍こそ置いていましたが、研究の場は東洋文庫であり、指導して下さる先生は主に京都におられる諸先生ということで博士課程の三年間を過ごす結果となりましたが、そうした状況を認めていただいた駒澤大学や指導教授の増永先生にも感謝しなければならな

版が継続されていた『大正新脩大藏經』の第八五卷に古逸部として収録し、この大藏經の学問的価値を大いに高めたのですが、その中に『無心論』『觀心論』や『楞伽師資記』など、多くの代表的な敦煌禪籍が含まれています。この『大正新脩大藏經』第八五卷とは別に、矢吹先生は昭和五年（一九三〇）に岩波書店から自身が将来されたロートグラフを影印で出版されました。これが『鳴沙餘韻』と呼ばれるものです。鳴沙とは敦煌莫高窟のある山の名前で、その山中に餘韻を響かせていたのが敦煌文献であつたということから命名です。こちらの方はオリジナルテキストの影印ですが、大正藏經の活字とは異なつた真実味があり、大変貴重なものです。そしてそれから三年後の昭和八年（一九三三）に、同じく岩波書店から先に出版した『鳴沙餘韻』に収録した文献の解説である『鳴沙餘韻解説』が刊行されました。特に『鳴沙餘韻』には古逸未伝の重要な禪籍が多く、従つてそれらを解説した「燉煌出土支那古禪史並に古禪籍關係文献に就いて」は、敦煌禪籍に関する最初の研究成果ということができます。当時この本は駒澤大学図書館では禁帶出扱いとなつており、後述する同様の鈴木大拙先生

生の『校刊少室逸書及解説』と共に、閲覧室に借り出してワラ半紙に鉛筆で筆写したもののが現在でも手元に残っています。尚矢吹先生には、同じく敦煌文献によつてのみ知られる隋代に信行によつて主張され、國家の彈圧によつて姿を消した三階教に関する大著『三階教の研究』があり、敦煌研究の上に大きな足跡をのこされたのです。尚、矢吹先生が『少室逸書』を出版された昭和五年（一九三〇）には、中国でペリオ本による神会の著作を校訂し、その研究を校写後記として出版された胡適先生の『神會和尚遺集』が出現していますが、当時としてはこの中国語で書かれた書物を読解するだけの語学力もなく、無為にすごしてしまったことは今日からすれば致し方のないことだと思つています。

〔二〕 鈴木大拙先生の著作

矢吹先生がロンドンに出向いてスタイン本の禪籍のロートグラフを日本に将来されたのに対し、鈴木大拙先生は北京に行かれ、北平図書館にあつた北京本を調査され、その中からこれも古逸未伝の禪籍を選んでそれを影印で印刷されました。これが自らが発行人となつて出版した『敦煌出

土少室逸書』で、昭和一〇年（一九三五）のことです。少室逸書の少室とは、禅宗初祖とされる達摩が面壁九年したといわれる嵩山少林寺のある山の名で、少室逸書とは達摩の禅法について説かれた古逸未伝の書という意味です。もちろんこの中には達摩の禅法を伝える『二入四行論』もありますが、それ以外に初期禅宗の代表的な語録が含まれていて、禅籍に関しては矢吹先生の『鳴沙餘韻』に勝るとも劣らない価値を具えています。そしてまた矢吹先生がその解説を出版されたのと同様に、鈴木先生もその翌年の昭和一年（一九三六）に、その校訂と解説を『校刊少室逸書及解説』、更に達摩の禅法を中心とした研究成果をその付録として『達摩の禅法と思想及其他』と題し、二冊一帙で大阪の安宅佛教文庫から出版されました。

以上は北京本中の禅籍に関する紹介と研究の集大成ですが、敦煌本中には、前述した通り個人の蒐集家の手に渡つたものもありました。特に禅籍に関して特筆すべきは、積翠軒の号を持つ石井光雄氏が蒐集したものの中に『神会錄』『絶觀論』『歴代法寶記』が存在することです。鈴木先生は昭和七年（一九三二）、石井氏が自ら影印で出版された『燉

煌出土神會錄』に解説を書いて付され、更に公田連太郎氏の協力を得て、その『神會語錄』の校訂に敦煌本と興聖寺本の『六祖壇經』の校訂を加え、各テキストの解説及目次の都合四冊を一帙として昭和九年（一九三四）に森江書店から出版されました。また昭和二十五年（一九五〇）には、古田紹欽先生の協力のもとに、鈴木大拙編・古田紹欽校『燉煌出土積翠軒本絶觀論』を弘文堂から出版されています。こうして鈴木先生は、達摩から慧能、更には神会に至るまでの語録の校訂と解説を完成され、それらの資料に基づく研究に新たにスタンダード・ペリオド等の資料を加えて、昭和二六年（一九五一）に岩波書店から『禪思想史研究第一』を出版されました。これには「達摩から慧能に至る」との副題がつけられている通り、達摩から慧能までの初期の禅が扱われていますが、北宗禪や慧能以後の南宗禪とりわけ神会や馬祖、石頭等については、鈴木先生の没後に岩波書店から『鈴木大拙全集』全三〇巻別巻二巻が出版されるのに際し、その第三巻として昭和四三年（一九六八）に『禪思想史研究第三』として出版され、こうして鈴木先生の初期禪思想史の研究の集大成がなされたのです。この内、比

較的入手し易かつた『禪思想史研究第一』は、次に述べる宇井伯寿先生の『禪宗史研究』と共に、私がもつともお世話になつた参考書ということができます。

（三）宇井伯寿先生の著作

鈴木大拙先生は臨済宗の居士であるのに對し、宇井伯寿先生は曹洞宗の僧籍を持つた学者です。宇井先生には『印度哲学研究』と題する全一三巻の一大叢書があつて、それ

が岩波書店から出版されたのですが、その内の三巻が中国禪宗の歴史を取り扱つたもので、昭和一四年（一九三九）に『禪宗史研究』、昭和一六年（一九四一）に『第二禪宗史研究』、昭和一八年（一九四三）に『第三禪宗史研究』、昭和一九年（一九四四）に『第四禪宗史研究』と、いうように二年おきに立て続けに大著が出版されました。すなわち宇井先生の三部作は、インドから中国に来て禪を中国にもたらした禪宗初祖とされる達摩から説き起こし、六祖慧能以後はもっぱら中国曹洞宗の成立と展開を考察し、後に日本から道元が入宋して如淨と邂逅し、如淨のもとで身心脱落した道元が日本に帰つて如淨直伝の仏法を日本に確立し、宇井先生自身がその法孫に当たるという背景を持つたものなのです。私自身、宇井先生と同様に道元の法孫に当たるわけであり、この三部作はいずれも貴重な研究成果だと思いますが、私の専攻する初期禪宗史に関する部分としては、『禪宗史研究』と『第二禪宗史研究』の前半が該当し、大いに学恩に浴することができました。私は矢吹

敦煌本『六祖壇經』の校訂とその成立の問題及び各種異本

慶輝先生に始まり、胡適先生を含めて鈴木大拙先生、宇井伯寿先生による研究成果が陸續として出現した昭和五年（一九三〇）より昭和三〇年（一九五五）頃までを、敦煌資料による禅宗史研究の第Ⅰ期と位置づけています。

四 関口真大先生の著作

先にも述べたように、昭和三一年（一九五七）に彰国社より出版された関口真大先生の『達摩大師の研究』は、私自身にとって画期的な影響を与えた新研究でありました。それは長い中国禅宗史の研究の歴史の上でも一時期を画するものと考えます。中国禅宗史の近代的研究は、明治四四年（一九一二）の松本文三郎先生による『達磨』を敲矢とするとみてよいと思いますが、その後大正年代に入つて、大正八年（一九一九）の孤峰智璲禪師による『禪宗史』、大正二二年（一九二三）と一四年（一九二五）の忽滑谷快天先生による『禪學思想史』上下二冊が出版されてその基礎が確立されます。しかし、この明治末年から大正年代にわたる約一五年間の研究は、敦煌資料には関係のない、いわば「敦煌資料以前」と位置づけることができます。

その後昭和年代に入り、先に見たように矢吹慶輝、胡適、鈴木大拙、宇井伯寿等の諸先生による諸研究が陸續として発表されますが、それが新たに出現した敦煌資料による新研究で、前述の如く「敦煌資料第Ⅰ期」としたわけです。従つて、関口先生の『達摩大師の研究』は、それに続く新たな「敦煌資料第Ⅱ期」の幕を切つて落とす役割を果たしたものとして極めて重要な位置を占めるものと考えます。

すなわち『達摩大師の研究』は、達摩の名を冠した初期の禅宗語録すなわち達摩論の研究ですが、それらの語録が実は達摩自身のものではなく、禅宗初祖と仰がれる達摩に仮託して自分の禅法を主張しようとした達摩系禅者による偽書であること、そしてそれでは各達摩論の眞の作者は誰であるかを明らかにするという新たな文献批判の立場に立つたものだつたのです。そしてこの研究によつて明らかになつた眞の作者の思想、禅法をもとにした初期禅宗成立史の研究が、関口先生の第二の研究成果として昭和三九年（一九六四）『禪宗思想史』の名のもとに山喜房仏書林より出版されました。この書の中で、関口先生は、初期禅宗の成立過程を、楞伽宗、東山宗、達磨宗（北宗・南宗・牛頭宗）、

禪宗の発生と展開としてとらえられましたが、この見解は今日の学会の定説となっています。また初期禪宗の通史としてもこの書の価値は高く、これ以後にこれにまさる通史は書かれていないとあっても過言ではないでしょう。

さて、先に多くの達摩論が達摩に仮託した偽書であることが明らかにされたのですが、関口先生が今一つ文献批判の立場から取り上げた問題が、禪宗で初祖と仰ぐ達摩の伝記についてであります。すなわち達摩の伝記に関する資料一七種をその成立順に配列し、達摩の伝記として各資料に記載されている事項を四三項目に分析し、各項目毎に資料の記載内容の有無とその変遷過程を詳細に検討して、歴史上の達摩から伝説上の達磨へといかに変遷し、実際の達摩とは似ても似つかぬ達磨像が作り上げられていったかを明らかにされたのです。この研究成果を発表されたのが、昭和四二年（一九六七）に岩波書店から出版された『達磨の研究』で、これが関口先生の初期禪宗史研究の第三の成果であります。この関口先生の三部作によつて、中国禪宗史の研究が新たな段階に入ったということができます。

五 柳田聖山先生の著作

関口先生が初期禪宗語録すなわち達摩論の文献批判をされたのと軌を一にするように、初期禪宗の歴史書すなわち燈史に文献批判を加え、各燈史の成立の背景と作者の意図を明らかにしようとされたのが柳田聖山先生です。先にも述べたように、柳田先生には既に早く昭和二九年（一九五四）発行の『日本仏教学会年報』一九号に「燈史の系譜」と題する論文があつて、燈史に対する文献批判は関口先生の成果以前に位置づけるべきかも知れませんが、その研究の集大成が、昭和四二年（一九六七）に法藏館から出版された『初期禪宗史書の研究』だったのです。すなわちこの書は、「中国初期禪宗史書の成立に関する一考察」という副題が付されている通り、「続高僧伝」（六四五）から『宋高僧伝』（九八八）までの約三四〇年間に出現した初期禪宗史書の内容を徹底的に分析し、各史書の作者の意図や成立の背景を究明した敦煌資料第Ⅱ期を代表する大著といべきものなのです。ただこの大著を読みこなすには、この分野に関するかなり高度な予備知識が必要で、後進の者に学問的意欲を鼓舞するに十分な役割を果たしたようと思わ

れます。

また柳田先生は、唐・宋代の俗語の多い禅宗語録や燈史の現代語訳を得意とされ、筑摩書房の「禅の語録」シリーズでは、昭和四四年（一九六九）に『達摩の語録』——入四行論——、昭和四六年（一九七一）に『初期の禪史I——楞伽師資記・伝法寶紀——』、昭和五一年（一九七六）に『初期の禪史II——歴代法寶記——』を、また中央公論社では昭和四九年（一九七四）に「世界の名著」シリーズの続3（後に18）に『禪語録』を出されています。これらはいずれも敦煌文献で、一般人には容易に近づき難いものですが、本文校訂、読み下し、現代語訳、語註という形式で理解し易い形にされていています。また先に燈史の成立についての大著について触れましたが、語録の成立についての総合的な研究成果も公にされています。すなわち昭和六〇年（一九八五）に京都大学人文科学研究所の機関誌である『東方学報』五七号に掲載された大論文で、「語録の歴史——禪文献の成立史的研究——」と題するものです。ただしこれは学術雑誌であるために、一般には容易に入手できまい点が残念に思われます。

以上は矢吹先生から柳田先生に至る日本の代表的な学者による研究成果について、若干の例外を除いて単行本を中心にしてきました。そのいずれもが中国初期禪宗史を専攻する者にとって欠くことのできないものであり、私自身こうした秀れた学術書——経巻——に導かれてまがりなりにも研究を続けてこられたことに深い感謝の念をおぼえずにはいられません。またここに掲げた先生方の著書や論文以外にも、関連する数多くの方々の著書や論文の恩恵にも浴して自分自身の研究を進めることができ、その成果を発表することができるようになつたことにも深く思いを致したいと思います。

三 私の敦煌学III——実物調査と成果のまとめ——

(一) ロンドン・パリでの実物調査

大学院時代、敦煌文献の研究は写真だけではダメで実物に当たって調査しなければならないことを入矢先生からアドバイスさせていた私は、それを実現する機会を待っていましたのですが、経済的事情をはじめ種々の条件が整わないまま歳月が過ぎていきました。ところが昭和四六年（一九七

二）度になつて、勤務先の駒澤大学に教員の在外研究制度が設けられ、幸いなことにその第一回の派遣員に選定していただきました。当時研究費として一五〇万円が支給されたのですが、ヨーロッパへの往復航空運賃が五四万円もした時代ですので、実質的に一〇〇万円弱が現地での滞在費となり、月に一四万円位かかるとして七カ月間を研究期間に設定し、最初の四カ月をロンドン大英博物館でのスタンダード（現在のセント・ペテルスブルク）の東方学研究所でのオルデンブルク本の調査に当てたいと考えています。何しろ日本を離れるのは生まれてはじめてのことであり、外国への入国から海外生活の仕方、それぞれの図書館での閲覧手続きや調査方法など予備知識ゼロの状態でしたので、既に私の予定しているのと同様の研究生活を経験されていた東洋文庫唐代史研究室の池田温先生に細かいアドバイスをいただき、準備をいたしました。

こうして昭和四六年度末の昭和四七年（一九七二）三月三日に羽田空港を出発し、モスクワ経由でロンドンに到着

し、商社に勤めていた知人の世話で最初の約半月間はロンドン東南郊外のモーテルに、その後の三カ月半は西北郊外の個人宅に下宿してそこから大英博物館に通うことになりました。大英博物館は現在では大英図書館を分離し、敦煌文献は大英図書館に移されていますが、当時は大英博物館の中心部分に中央図書館があり、敦煌文献を調査する東洋刊本写本部図書室は、正面ロビーから右方向に進んだ一番奥にありました。スタイン本については、ジャイルズ氏の編纂による『大英博物館所蔵敦煌出土漢文文献記述目録』と題する英文の詳細な目録が出版されており、また北京本、スタンイン本、ペリオ本等の内容を検索するのに便利な北京商務印書館発行の『敦煌遺書総目索引』を日本から持参していましたので、それらによつて必要な文献を借り出して調査し、ノートにメモするという方法をとりました。これは既に整理の済んでいる文献ですが、全部で約二三〇点を調査したことになります。ところがスタンイン本には未整理の断片が数多く残されていることも知られていましたので、キーパーのネルソン先生や中国部の陸玉英さん（現ブラウン夫人）のお世話を最後の一週間を未整理部分の調査に当

てました。天井の低い書庫の中で、五〇点ずつ収めた箱の中からかなり黄ばんだ白紙に包まれ、軽く白いひもで結んだ断片をとり出して調査するのはかなりハードな作業でした。その中に『一入四行論』(S七一五九)や『大乗無生方便門』(S七九六二)の断片を発見することができたことは収穫だつたと思います。いずれにしても今まで写真でしか見ていなかつた文献の実物が目の前にあるということは感激の極みであり、単調になりがちな研究生活に喜びと鋭気を与えてくれたのもそれらの“本物”的文献であつたと思います。

四ヶ月間のスタイン本の調査でほぼその目的を達することができたので、当初の予定通り八月一日にロンドンを出発し、次の目的地パリに到着しました。パリでは偶々私の大学の後輩がいましたので、彼の世話で南郊外の大学都市に住むことになりました。最初の数日間は日本館にいましたが、その後は朝食のつくアメリカ館に移りました。ここでは英語が通用するので、三ヶ月も滞在しながらフランス語がさっぱり身につかなかつたことも事実です。パリの国立図書館は市の中央に位置し、正面から入ると中庭の右側に

大閲覧室があり、敦煌文献を調査する東洋写本部は逆に左側の二階奥にありました。特にこの図書館では、日本語のよく出来る朝鮮仏教専門の朴炳善先生がおられ、閲覧手続きから館員食堂での昼食の世話までしていただきました。

また大英博物館の東洋刊本写本部では東洋人はほとんど見掛けず、その多くはユダヤ教の研究者でしたが、パリの国立図書館東洋写本部には、中国人や日本人の研究者が出入りし、フランス人でも仏教の研究者が目立ちました。ドゥミエヴィル先生にもお目にかかり、呉其昱先生にもよくお会いしました。ペリオ本は数こそスタイン本には及びませんが、東洋学者であつたペリオが将来したものは質的に秀れたものが多く、禅宗文献についても特に貴重なものがあつて、毎日の調査は大きな励みとなりました。このペリオ本の調査の最大の収穫は、先にも述べたことですが、大学院時代に柳田先生からノートを貸していただいた『聖胄集』の別本とされた北京本讐二九の完全なテキストである『金剛峻經金剛頂一切如來深妙秘密金剛界大三昧耶修行四十二種壇法經作用威儀法則、大毗盧舍那仏金剛心地法門秘法戒壇法儀則』という長いタイトルを持った密教文献が、P二

九一三に存在することを発見できたことです。今このテキ

ストを『壇法儀則』の略称で呼ばせていただきますが、この文献は全部で三五品からなつていて、その最後の第三五品が「付法藏品部」と呼ばれ、その中に禅宗の燈史である『聖胄集』の巻一の部分が引用され、しかもそこに密教的改変の手が加えられていたわけですが、先の北京本讖二九は、この『壇法儀則』の最後の「付法藏品部」の一異本であつたことが明らかになつたのです。日時こそ確かにありましたが、このテキストが讖二九の完全なものであることがわかつた瞬間というものは、感激で身の震えを覚えた貴重な体験をさせてもらいました。

パリでの三ヶ月間は、何となく孤独なロンドンでの研究生活と違つて、充実した毎日を過ごすことができたように思います。そんなわけで、当初予定していたレニングラード行きは中止せざるを得ませんでしたが、所期の目的を十分果たし、九月二二日正午にパリを出発し、往路と同じくモスクワ経由にて翌九月二三日正午近く無事羽田に帰着することができました。

（二）研究成果のまとめ

文献調査という仕事はとても根気を要することですが、それはあくまで手段であつて、その調査の結果を従来の成果に加えてそこから新たな結論を導き出すことをしなかつたならば、折角の調査結果を生かすことができません。かといって、研究成果というものはそう簡単に出せるものではなく、不斷の積み重ねが必要です。また研究の方法についても、勿論自分自身の専門とする分野がなければなりませんが、同時に共通の研究テーマを共同で研究する方法があります。先にもいいましたが、私は大学院の学生時代に自主ゼミの恩恵に浴しましたので、自分が教員として採用していただいた当初から、自主ゼミを実施しました。最初の内は特定のテキストを読解することだけで、それを形にするなんてことは考えてもみませんでしたが、ある程度力がついてくると、何か成果として発表したいという意欲がわいてきました。そんなことで私が助教授になつた昭和四五年から禅宗史研究会という任意の研究団体を組織して共同研究を始めることにし、若い研究者八名で六祖慧能の著作と伝記の研究を継続して実施しました。このメンバーの

中には、現在貴学で教鞭をとつておられる川口高風先生と吉田道興先生もおられました。八名のメンバーはそれぞれ得意の分野があり、私一人では到底不可能なことが次々と具体化されていくことに共同研究の大きなメリットのあることを知らされました。いよいよ原稿が完成する時期になつて、当駒澤大学で編纂した『禪學大辭典』の出版元であつた大修館書店にご紹介の労をとつて下さつたのが、当駒澤大学副学長で現総長の桜井秀雄先生でした。そのお蔭で研究を開始してから八年後の昭和五三年（一九七八）、当駒澤大学禪宗史研究会編著『慧能研究』が世に出ることになりました。これが私の関わった最初の学術書です。

ちょうどこの書が完成した頃、当時各分野の研究が盛り上がつて来ていた敦煌学を総合的に集大成しようという気運が盛り上がり、大東出版社が「講座敦煌」全一二三巻の刊行を計画しました。この計画は後に全九巻に縮少されましたが、その第八巻が『敦煌仏典と禪』と題され、敦煌の禪籍に関する研究成果がまとめられることになりました。敦煌の仕事を篠原寿雄先生と私がすることになりました。敦煌の禪宗文献をその内容の上から分類すると、(一)禪宗の歴史

を述べた燈史類、(二)禪法を問答形式で説いた語録類、(三)悟境や修道の用心を説いた偈頌類、(四)禪僧の手になる経注、経抄や偽經類の四種に分けることができますので、これを本論の章立てとしてそれぞれ研究者に分担執筆をお願いし、更に近年急速に研究の進んだ中国禪とチベット仏教との関係についてはこの分野の専門家であられる山口瑞鳳先生にお願いして最後の一章とし、全体にわたる総論を柳田聖山先生に担当していただき等、最善の執筆陣を組織してその完成を目指しました。執筆陣の中には、貴学の鈴木哲雄先生がおられ、中国禪宗史では最も大きな問題とされている神会の北宗批判について論述していただきました。こうして昭和五五年（一九八〇）にこの書が出版されました。アメリカの仏教学界をリードしているイエール大学教授のワインスタイン先生からは、「一冊で敦煌禪籍のすべてを知ることのできる便利な本」との評価をいただきましたし、出版社からは「講座敦煌」の中で最初に再版を出すことになつた巻だと聞いています。

この『敦煌仏典と禪』は、講座の一冊として敦煌禪籍の全体像を明らかにすることを目的としたものですが、私は

身のかねてからの研究テーマが「敦煌禪宗文献の研究」であり、従来その中の個々の文献についての研究成果を学界で口頭発表し、また学術雑誌に論文の形で掲載しており、研究を初めてから既に四半世紀もの歳月が過ぎておりますので、先の『敦煌仏典と禪』が出版された昭和五五年（一九八〇）の終わり頃から、従来の個別的な研究成果を組織的に体系化する作業に取りかかりました。その場合、先の敦煌禪籍の内容上の分類に準拠して、（一）燈史、（二）語録、（三）偈頌、（四）その他に分けて文献研究の成果をまとめ、その後に余論として、（一）初期禪宗をめぐる諸問題、（二）禪宗伝燈説をめぐる諸問題、（三）禪宗伝燈説の歴史的展開の三章を加え、全体で七章からなる論文にまとめ、「敦煌禪宗文献の研究」のタイトルを付して昭和五七年度初めに駒澤大学に学位請求論文として提出し、一方、その原稿は先の「講座敦煌」を刊行中の大東出版社より同名の書物として昭和五八年（一九八三）一月に出版していただき、同年三月に学位も授与していただきました。しかし、この時の無理がたたり、その後かなり長期にわたって体調をくずしてしまい、多くの方がたにご迷惑をかけてしまったことを大い

に反省しています。再び健康をとりもどしてみた時に、人生で健康ほど有り難いものはないことを痛感いたしました。

今一つこれも共同での成果ですが、中央公論社の「大乗仏典、中国・日本篇」全三〇巻の一冊として、第一一巻に敦煌禪籍の現代語訳と語注、解説を内容とした『敦煌Ⅱ』が加えられ、花園大学の沖本克己先生と私が編集責任を負うことになりました。これにはまだ現代語訳の刊行されない初期の禪語録を内容とすることにし、法融の『絶觀論』を柳田聖山先生に、神会の『壇語』を杏林大学の中村信幸先生に、同じく神会の『問答雜微義』を貴大学の鈴木哲雄先生にお願いし、チベット文の禪籍は沖本先生、弘忍の『修心要論』、神秀の『觀心論』、神会の『定是非論』、慧光の『頓悟真宗論』は私が担当することにして平成元年（一九八九）に刊行されました。敦煌禪籍の二本柱は燈史類と語録類ですが、その内、燈史類については既に筑摩書房の「禪の語録」シリーズで柳田先生がその主要なものの現代語訳をされていますが、語録類については同じく柳田先生の『達摩の語録——二入四行論』のみで、神会の語録類は未刊のままであり、今回の『敦煌Ⅱ』でその欠を

補うことができたと考へています。

以上、私が直接関わった研究成果について概略を述べてきました。まだまだ手のつけられない文献や未解決の問題、更には最近新たに提起された問題等、今後に残された課題は多いのですが、それらについても可能な限りその解明に努めたいと考えています。また私の研究成果に対し、新たな資料や視点から批判をして下さる研究者もふえてきていますが、私はそれらの批判を謙虚に受けとめ、自説の是正をはかつていきたいと思つています。

結——敦煌莫高窟第一七窟前に佇みて——

以上述べてきたように、私の研究生活はひたすら敦煌禪宗文献とのおつきあい以外の何物でもなかつたわけですが、最近、もし敦煌文献が今日まで発見されずに第一六窟の入口右側に眠つたままになつていたら、自分自身は一体何をしただろうかと思うことがあります。それ故に、敦煌文献のお蔭で研究することの苦しみも喜びも味わわせていただいたという感慨を覚えずにはいられません。私の生涯を決定づけたといつても決して過言ではないこの敦煌文献が九

〇〇年以上も眠つっていたという敦煌を、そして莫高窟を、更には第一七窟を一度は自分の目で確かめ、文献が保存されていた事実に心からの感謝の誠を捧げたいという思いが次第に強くなつてきました。そんな時、敦煌の地を訪れる絶好の機会が訪れたのです。

平成二年（一九九〇）の秋一〇月、敦煌文物発見の一九〇〇年からちょうど九〇年目に当たつて、敦煌文物の管理保全と調査研究を目的に設立された敦煌研究院の主催により、第二回敦煌学国際学術討論会が開催され、それへの招聘状をいただいたのです。その内容については、先にも触れたことですが、私も研究発表をするために「敦煌の禪語録とその特性」と題するペーパーを用意し、かつて東洋文庫唐代史研究室におられ、現在国学院大学教授をされている土肥義和先生と共に一〇月五日に成田を立ち、北京、蘭州経由で一〇月七日に敦煌に到着し、七日夜の歓迎会、八日から一二日まで五日間の研究発表の後、いよいよ一三日の午前に、莫高窟の見学の機会が与えられました。千仏洞は幅約二キロにわたつて点在していますが、第一七窟を内側に具えた第一六窟は向かつてかなり右側に位置し、第一

私の敦煌学（田中）

六窟の入口から奥に入る通路の右側に、まさしく第一七窟を認めることができました。以前はその中にも立ち入ることができたと聞いていますが、現在は第一七窟の入口に金網の戸が設けられ、従つてその金網越しに中をのぞく以外に方法がありません。しかし、その金網前に佇み、今はガランとした第一七窟をのぞきこんだ時、身体に熱いものが流れたような気がいたしました。ロンドンの大英博物館にあつた未整理の断片にくついていた砂は、ロンドンに到着して既に六五年位たつていたわけですが、実はその砂はまぎれもなくこの自分が今立つてている目の前の第一七窟の砂に違いない、との思いが私の脳裏をかすめました。長い歴史的時間と遠い距離的空間の凝縮されたものこそロンドン大英博物館書庫四階で見た断片に付着した砂であつたのです。大英博物館の敦煌文献は大英図書館に移され、今ではかなりの部分まで整理が進んでいるということですから、私の見た砂は既に払い除かれていると思いますが、第一七窟前での感慨は、「私の敦煌学」を総括する生涯忘れる事のできない一大エポックであつたと確信しております。ご清聴誠に有り難うございました。